

ミュージアムにおける発見学習～日本科学未来館の火星イベントを通じて～

Discovery study in the Museum -through the Mars event at the National Museum of Emerging Science and Innovation-

新井 真由美[1]

Mayumi Arai[1]

[1] 日本科学未来館

[1] MeSci

<http://www.miraikan.jst.go.jp/>

日本科学未来館は、最先端の科学技術を一般の人々に伝えることを大きな柱とした新しいタイプのミュージアムである。日本科学未来館のMMコンセプトの中に「見てもらうのは物より人です」「開かれた研究の拠点となり研究者を支援します」「コミュニケーションとネットワークづくりも私たちの仕事です」等があり、多面的な角度で2003年に火星を題材としたイベントを企画し開催した。ここでは、ミュージアムにおける最先端の科学とのふれあいの場の提供と新たな発見作りの場について火星のイベントを事例として紹介する。

2003年は、火星が約6万年ぶりに大接近した年でもあり、世界中の天文台や科学館でも火星大接近をテーマとしての催しが開催された。また、新聞やテレビにも火星大接近の話題が多く取り上げられ社会現象にもなった。これは、1997年のハレー彗星が地球に大接近した時のように世の中に影響を与えた。また、2003年夏には欧州の火星探査機「マーズ・エクスプレス」や、米国の火星探査機「マーズ・エクスプロレーション・ローバ」2機が打ち上げられた。未来館では、火星の研究者（地上観測者、惑星探査の研究者等）にスポットをあてることで、様々な角度から惑星科学の研究者を身近に感じてもらえるように講演会を企画した。同時にWEBにおいて、様々な研究者（10名程度）の研究分野の紹介のみでなく、人物がわかるようなインタビュー、若者へのメッセージなども展開した。未来館は主に、中学生・高校生をターゲットとしているが、この企画では、小学生から一般の方にも参加体験してもらえよう工夫をした。その他、火星の模擬砂や火星ブロック、巨大火星儀、火星探査機の模型、火星で成育させる生物の研究紹介等の展示会や、火星基地3Dカードのワークショップ、月・惑星探査ローバのデモンストレーション等を通じて多角的に火星研究最前線を伝える手法を試みた。その他、プラズマディスプレイや400インチ巨大ディスプレイ、直径6.5メートルの球体ディスプレイにて映像によるアプローチや書籍の閲覧コーナーの設置、ミュージアムショップとの連携も試みた。さらに、研究者の監修のもと、火星の模擬砂をおしゃれにパッケージしたサイエンティフィックな思い出の品を製作し来場者にプレゼントした。企画者からのメッセージや砂の成分表、さらに大きなテーマ「火星を知るとは、地球を知ること」をプレゼントの中に取り込んだ。

夏休みの自由研究で火星について取り組もうとしている子供達に、本企画は多大な貢献ができたのではないだろうか。また、火星大接近の時期よりも3週間早くイベントを開催したことがプレスへの事前学習・告知の場となったのか、その後の、取材協力依頼、研究者紹介、展示物の貸し出し依頼が絶えなかった。

2003年秋には、欧州火星探査機「ビーグル2の旅」の展示会を開催した。Innovation UK 主催、駐日英国大使館、British Council、在日英国商業会議所の共催のもと日本で一番最初にこの巡回展示を開始した。英国の歴史、サイエンス、そしてアートの融合展示であり、同時にウォールギャラリーを火星をテーマとして模様替えをした。

サイエンスに興味をもつきっかけ作りとしては、例えば、来場者へボランティアが直接語りかけることでわかりやすく解説をすることは大きなウェイトを占める。ワークショップやデモンストレーションでは、参加することで大きな印象が植え付けられる。その他、本発表ではサイエンスに興味のない人にも、アートという角度から自然とサイエンスに取り込まれていく仕組みについて考察する。小中高生や一般、初心者へも時期を得て、科学のトピックスが多角的な視野でわかるよう、親しみやすい表現手法を駆使した。ミュージアムにおける小中高生への働きかけ・役目・サイエンスの発見の場づくりについて提案する。